

第10回 BELCA賞 表彰式

さる5月14日(月)、BELCAの理事会・総会と合わせ、第10回のBELCA賞表彰式を挙行し、ロングライフ部門5件、ベストリフォーム部門5件の計10件を第10回BELCA賞として表彰いたしました。ここに当日の模様をお届けいたします。



会長挨拶

BELCA 会長 高木 丈太郎

会長の高木でございます。

表彰式の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本日は御多忙のところ受賞者の皆様を始め、多数の方々のご出席を賜り、誠にありがとうございました。

さて、平成3年よりはじまりましたBELCA賞は、今回の表彰で第10回という節目を迎えることとなりました。

記念すべき第10回となりました今回も、全国から優秀な物件を多数ご応募いただきました。これも建物オーナーの方々をはじめとする関係者の皆様の本賞に対する深いご理解の賜物であろうと考えております。

おかげさまをもちまして、BELCA賞の知名度も年々高まり、ユニークな賞としてご評価いただいております。このことから良好な建築ストックの形成に寄与するという賞の目的を着実に果たしていただいております。

本日表彰いたします10物件を合わせますと、BELCA賞の表彰件数は100件に迫る数となり、優良な建築ストックとはどのようなものかというイメージを、広くお示しできているのではなかろうかと考えております。

BELCA賞がここまでこれられたのも、本日ご参会の皆様を始め多くの方々のご指導・ご鞭撻の賜物と深く感謝申し上げます。

また、審査にあたりましては、審査委員の方々が大変ご苦心されたとお話を伺っておりまして、改めて審査委員の方々には厚く御礼申し上げます。

本日表彰されます物件が、わが国の優良な建築ストックの良き範となるものと確信いたしており、受賞者の皆様に対しまして、深く敬意を表しますとともに、心からお慶び申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。





内田審査委員長による審査総評



ロングライフ部会内井主査による審査講評



ベストリフォーム部会深尾主査による審査講評



コープオリンピアの渡会理事長様による
ロングライフ部門受賞者代表挨拶



杏林製薬株式会社の上條常務取締役様による御挨拶

(役職等は全て表彰式当時のもの)

BELCA 賞の概要

BELCA賞は、適切な維持保全を実施したり、優れた改修を実施した既存の建築物のうち、特に優良な建築物の関係者を毎年表彰し、これを周知させることにより、良好な建築ストックの形成に寄与することを目的とするものであり、既存の建築物を総合的に評価して表彰する制度としては我が国初のものである。

BELCA 賞は平成3年に創設され、今回の表彰が10回目である。

受賞者には（社）建築・設備維持保全推進協会会長より表彰状が贈られ、また所有者に対しては、文化勲章受章者・文化功労者の彫金作家帖佐美行氏の手による賞牌も贈呈される。

選考の対象は、ロングライフ部門とベストリフォーム部門の2部門が設けられている。

ロングライフ部門は、建築物のロングライフを考慮した適切な設計のもとに建設され、長年にわたり適切な維持保全を実施した特に優秀な建築物で、建築後20年以上を経過した建築物を表彰するものであり、ベストリフォーム部門は、最近改修（リフォーム）された建築物で、当該改修により画期的な活性化がはかられ、改修後1年以上を経過した建築物を表彰するものである。

なお、受賞者はロングライフ部門については、建物所有者、設計者、施工者、維持管理者の四者であり、ベストリフォーム部門については建物所有者、（改修に際しての）設計者、（改修に際しての）施工者の三者である。

また、今回までの受賞数はロングライフ部門48件、ベストリフォーム部門48件の合計96件である。

第10回 BELCA 賞審査委員会

委員長	内田 祥哉	（東京大学名誉教授）
副委員長	村尾 成文	（（株）日本設計取締役副会長）
ロングライフ◎	内井 昭蔵	（滋賀県立大学環境科学部教授）
部	会○藤木 忠善	（東京芸術大学美術学部建築科教授）
委	員 木村 建一	（早稲田大学理工学総合研究センター教授）
	阿部 紘己	（（株）KAI 建築コンサルタンツ取締役社長）
	伊藤 肇	（三菱地所（株）取締役建築設計第一部長）
	舟橋 巖	（（株）大林組顧問）
	松原 忠策	（（株）松田平田 専務取締役）
	村尾 元朗	（（株）日建設計 東京本社設計室設計長）
ベストリフォーム◎	深尾 精一	（東京都立大学大学院工学研究科教授）
部	会○高橋志保彦	（神奈川大学工学部建築学科教授）
委	員 鎌田 元康	（東京大学大学院工学系研究科教授）
	伊藤 隆志	（三井不動産（株）建設企画部建設企画課長）
	正田 良次	（高砂熱学工業（株）取締役東京本店副本店長）
	村田麟太郎	（（株）山下設計 取締役副社長）
	本木 秀美	（第一建築サービス（株）常務取締役東京支店支店長）
	横沢 国夫	（大成建設（株）常務設計本部長）

（◎：主査 ○：副主査 所属・役職等は、審査当時のもの）

第10回 BELCA 賞ロングライフ部門審査総評

ロングライフ部会主査 内井昭蔵

ロングライフ部門には BELCA 賞の主旨にかなったすぐれた作品の応募があり、今回もいずれを受賞対象とするか困難な審査会となった。

最初に提出された資料に基づき審査員全員で閲覧し、討議したのち、おおよその評価をした上で現地審査を行った。現地での審査は、資料では知り得なかった多くの発見があり、又、応募者の生の声を聞くことができ非常に参考となり、意義のあることであった。現地審査のあと慎重な審議の結果、「コープオリンピア」「最高裁判所庁舎」「国際ビルヂング・帝劇ビル」「東日本電信電話株式会社 研修センタ 講堂」「別子銅山記念館」の5件を受賞作品として推薦することにした。

今回、BELCA 賞受賞作品に共通していえる点は、いずれの作品もあらかじめロングライフを意識した設計がなされているという点である。長寿命を果たすには管理体制をはじめ、すぐれたメンテナンスシステムが重要であるが、デザインが良くなければ決して寿命を保つことはできない。

「コープオリンピア」は60年代の分譲マンションであるが、市街地型居住の先駆けとなった住宅である。この場合、多くの独創的デザインが長寿のもととなっている。今日みてもその存在は決して古くはなく、充分機能を満たしている。

「最高裁判所庁舎」は庁舎建築ではあるが、建築の性質上、モニュメンタリティが生かされ、綿密な設計の中に建築の長寿を守るシステムが組み込まれている。

「国際ビルヂング・帝劇ビル」も一般的にみれば寿命の短い商業建築でありながら、すぐれたデザインにより今日なお立派に通用する建築となっている。

「東日本電信電話株式会社 研修センタ 講堂」は50年代、モダニズムの時代を示す素直で機能的なデザインであり、今日みてもフレッシュな印象を与えてくれる。設備は入れ替わったとしてもその空間の質は立派に保たれ、当初のコンセプトが生きている。

「別子銅山記念館」は70年代でありながら環境問題を正面から受け止め、屋上緑化の先駆けとなる独創的デザインが示すように、すぐれた設計が長寿命をもたらす大きな原因となっている。

ロングライフとレストリフォームとの差異がつけにくいことはこれまで議論されてきたことだが、ロングライフの意義はどれ程すぐれた設計がなされていたかにかかっていると考えられる。リフォームやリニューアルによって長寿命を果たすことも大切だが、そのオリジナルな建築がすぐれたデザインであることがなければ、それ以上のリフォームは難しいのではないだろうか。

第10回ロングライフ部門での入賞作品は、いずれもオリジナリティのあるすぐれた設計のものばかりであった。

第10回 BELCA 賞ベストリフォーム部門 審査総評

ベストリフォーム部会主査 深尾精一

第10回 BELCA 賞ベストリフォーム部門には、今回も多様な作品の応募があり、書類および写真による第一次審査を経て、多くの審査委員が参加する第二次の現地審査を行った。今回の二次審査に残ったものには、例年以上に意欲的な作品が多く、審査委員会では様々な議論が闘わされたが、最終的には以下の5件が選出された。

宇目町役場庁舎は、1975年に建設された RC 造の林業研修センターを、躯体だけを残して大規模に改修し、庁舎として再生させたものである。元の建築は、どこにでもあるような鉄筋コンクリート柱梁構造の公共施設であるが、町民の集う場所となる増築部分を斬新な形態とすることにより、イメージを一新し、設計者の唱える「リファイン」に成功している。既存部分と増築部分との間に、開放的な明るい空間が創り出されており、元の建築を活かしながらも、まったく新たな作品に生まれ変わらせていることに、審査員から高い評価を得た。

太田市立休泊小学校は、典型的な片廊下型の鉄筋コンクリート造校舎を耐震改修するにあたって、一般に行われている斜めブレースの採用を避け、改修を新たな空間の構築に意欲的に発展させたものである。「アタッチドフレーム工法」と呼ばれる手法を採用し、平面計画の自由度を保つことによって、教育方法の変化に対応できる空間のつなげ方を可能にし、魅力的なコーナースペースなどを創出している。低層部を南側に張り出し、その上を教室と連続するテラスとする手法などは、学校建築の改修手法の好例として、同様なストックを抱える多くの自治体の参考になるであろう。構造的な改修にかかわる施工者の努力も高く評価された。

杏林製薬本社ビルは、1965年に建設された典型的な中規模オフィスビルの改修事例であり、躯体以外の部分には大幅に手を入れ、建物のイメージを一新させている。設計組織独自の POE (施設利用者満足度調査) 手法を利用して、改修効果を高めていることは特筆に値しよう。エントランスホール周辺やコア部分の変更、トイレの改修、設備方式の変更に伴う地下機械室の食堂への転用などは、一つ一つは事務所ビルの改修として目新しいことではないが、その総合的な改修結果がオフィスリフォームの好例として高く評価された。外装は本石仕上げに張り替えられているが、立面のプロポーションなども、改修とは思えない建築作品に仕上がっている。

神戸税関本関は、永年神戸のランドマークとして親しまれてきた建築に、高度な設計手法によって新館を増築することにより、新たな庁舎建築を創り出した事例である。旧館の部分は公開スペースと研修所として利用されているが、中央ホールとそれを囲む西側の部分が撤去され、中庭とアトリウムを創出するように新館が増築されている。新館のファサードは、旧館に合わせて設計され、あたかも旧館とともに70年以上そこに建っていたかのようなようであるが、その高層部に造られた部分は、現代の技術でアトリウムの上部に浮いている。組織設計事務所の総合的な設計力が如何なく発揮された、貴重な建築物の見事な再生・活用事例である。公開されている中庭からの旧館も、新たな景観として魅力的である。

洲本市立図書館は、1910年代に建設された広大な紡績工場の、最後に残された一区画を新たな市立図書館に甦らせた事例である。小屋組み等は撤去されており、レンガ外壁の保存とレンガの床仕上げ等への再利用を図った計画であり、狭義のリフォームの枠を超えるものである。しかし、レンガ壁体のみを残すことや新しい機能の建築に組み込むことの難しさを克服して、優れた図書館としての平面計画と空間をもつ高度な建築作品に纏め上げていることが高く評価された。市民に開かれた図書館を目指した発注者と設計者の熱意が、建築の隅々にまで生きているような建築であり、設計者の力量が古いレンガを現代に甦らせているといえよう。

今回の応募には、最終の選には漏れたが、今までにはみられなかった新たな改修の考え方を実現した事例がいくつか見られ、同じ土俵で評価することの難しさを感じさせられた。古い建築を活かして永く使い続ける手法は、今後さらに多様になるであろう。BELCA 賞の審査はより難しくなるであろうが、それは望ましい方向であるのかもしれない。